



TITLE:

中高ドイツ語の動詞 mügen の一用法について

AUTHOR(S):

石川, 敬三

CITATION:

石川, 敬三. 中高ドイツ語の動詞 mügen の一用法について. ドイツ文学研究 1968, 16: 1-14

ISSUE DATE:

1968-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184925>

RIGHT:

中高ドイツ語の動詞 *mügen* の一用法について

石 川 敬 三

最近、といってももう4,5か月前のことになるが、中世ドイツの抒情詩集 *Des Minnesangs Frühling* ⁽¹⁾〔以下略語MF〕を読んでいる、次のような箇所につかった。

Dâ ist doch mîn schulde entriuwen niht sô grôz
als rehte unsælic ich ze lône bin.
ich stân aller vröiden rehte hendeblôz
und gât mîn dienst wunderlîche hin.
daz geschach nie manne mê.
volende ich einest sende nôt,
sin tuot mir mê, *mag ichz behüeten*, wol noch wê.

これはミンネ歌人 Reinmar の „Niemen seneder suoche an mich deheinen rât“ ではじまる詩 (MF 170, 36) の第4詩節 (MF 171, 18—24) であって、Max Wehrli の *Deutsche Lyrik des Mittelalters* に載っている、これの現代ドイツ語訳をあげると、次のようになっている。

Da ist doch meine Schuld wahrhaftig nicht so groß
wie meine Erfolglosigkeit.

Ich stehe aller Freuden bar und bloß,
und mein Dienst geht wunderlich dahin.
Das ist nie einem Mann so sehr geschehen.
Komme ich einst zu Ende mit meiner Liebesnot,
so wird sie mir, *gelingt's mir*, weder wohl noch weh
mehr tun.

これでは原文の *mag ichz behüeten* (171, 24) が *gelingt's mir* になっていて、内容的にはいいかえられているが (mhd. *behüeten* には 1. *bewahren* と 2. *verhüten* と二つの意味があるが、1. の意味にとったのかも知れない)、原文を *wenn* の省略された副文にとっていることは間違いないようである。

また H. de Boor は *Die deutsche Literatur. Texte und Zeugnisse. Mittelalter* 2. S.1522 で、この箇所の後半の註に、次のように書いている。

wenn ich einst meine Liebesqual vollende, so tut sie mir, sofern ich es abwenden kann, hinfort weder wohl noch weh.

この方は *behüeten* を *verhüten* の意味にとっているようであるが、これもまた原文の *mag ichz behüeten* を副文にとって、*mag* を *mügen* の普通の意味に解し、*kann* と訳している。

因みに Mhd. の *mügen*, *mugen* は Nhd. の *mögen* にあたるが、Nhd. の *können* に相応する *kunnen*, *künnen* が *kennen* と語源を同じくし、精神的能力をあらわすのに対して、*mügen*, *mugen* は肉体的、外部的能力をあらわすのが原意である。この *mügen*, *mugen* はまた他の動詞の不定詞と共に話法の助動詞として使われるが、Lexers

Mhd. Taschenwörterbuch に載っているだけでも, —mächtig, imstande sein, vermögen mit infin.; möglichkeit haben, können; recht und ursache haben, sollen, dürfen; der möglichkeit gemäss wollen: imperat. frage.“ といろいろな用法があつて、今ここで問題にするのも、上記の場合の mag がそれらの用法の中のどれに当るか、ということである。

さてラインマルのこの詩は、Carl von Kraus の主張する Zyklus (連作) の最後の作品にあたるものであつて、⁽⁹⁾ ラインマル本来の立場に立って考えると、ここでいっているのは、彼の他の作品に於いてと変りなく、

「私は常に婦人たちのことをほめ称えて来た。残念ながらそれは私には何の役にも立たなかつた。(以上前節の終1行)。しかし、私がほんの少しも報いられないなんて、私の罪は決してそれほど大きくはない。私は何の喜びももたず、私の奉仕は奇妙なことに全く無駄である。このような目にあつた者はほかにはいない。(しかし) 私がいつか恋の苦しみをやめるなら、私にはもう喜びも苦しみもなくなってしまう。どうかそのようなことになりませぬように」というのである。つまりラインマルが云おうとしているのは、苦しみを与えられることは、苦しみも喜びも与えられないよりましだ、ということであつて、彼自身 MF 166, 38-9で、
„von ir enmac ich noch ensol. sô sich genuoge ir liebes fröunt, sost mir mit leide wol.“ 「かの女(ひと)より離れ能わず、また離れまじ。多くの人その喜ばしき事を喜ぶも、苦しみもて、我は楽し」と云い、またその模倣者(Pseudo-Reinmar)が彼に倣つて „man sol sorgen: sorge ist guot; âne sorge ist nieman wert.“ (MF 198, 35-6)

「ひととは憂うべし。憂いこそよけれ。憂いなくしては何人も尊からず⁽³⁾」と歌った、あのラインマルが、恋の苦しみのなくなることに對して、「どうかそのようなことになりませぬように」といつているのに相違ない。もしそうであるとすれば、この場合の *mag ichz behüeten* は願望文と思われるのであるが、果してそれが可能であらうか。

幸い同じラインマルの作品の MF 161, 40と167, 4に *mügen* のこれによく似た用法がある。161, 40の方は「『恋』がやって来て、私を襲ったとき、どうして『恵み』は恵み深く調停してくれなかったのだろう。彼女（即ち「恵み」）の慰めがこれまでに多くの人のために尽したので、心楽しくありたい人々がするように、私は彼女に、私にもそうしてくれるようにと頼んだ。しかし、残念なことに彼女は戸の中に身を隠してしまった」といつて、その後、

mac si sehen an mîne stæte. (161, 40)

gê dur got her vür

gebe stiure daz ich kome ûz sorgen;

と続くのであるが、これは「私の変らぬ誠を見てもらいたい。どうか後生だから、出て来て、私が憂いからぬけ出すように助けてほしい」といつて、「恵み」に向つて願望しているのである。この *mac si sehen an mîne stæte* の後には、主語の省略された要求の接続法が続いていて、この *mac* がそれとほぼ同じ用法として使われていることは明らかである。

また MF 167, 4の方も

Mac si mich doch lâzen sehen, (167, 4)

ob ich ir wære lieb, wie si mich haben wolte.

「もし私が彼女の気に入るなら、彼女は私をどのように取り扱おうと

中高ドイツ語の動詞 *mügen* の一用法について

するのか、見せてもらいたい」というのであって、ここでもその後 *so tuo geliche deme als...* と主語の省略された接続法が続いているが、この *mac* の文も願望文と考えざるを得ないのである。

Mhd. で助動詞を用いて願望をあらわすには、*müezen* の現在形接続法を用いるのが普通であるが、このように *mügen* を、それも直説法を用いることが度々あるのであろうか。ふとそんな疑念が浮んで、Paul の Mhd. Grammatik 及び Deutsche Grammatik, Behaghel の Deutsche Syntax, Grimm の Deutsche Grammatik など心当りの文法書を調べてみたが、この疑問を解く説明を見つけることはできなかった。

また辞書の方でも探してみたところ、Grimm の Deutsches Wörterbuch の „mögen“ の項に、

II. Bedeutung 7) andererseits wieder zu dem begriffe des freistehens übergehend, die anwendung einer kraft ist ins belieben gestellt; in mehrfacher weise;

a) mögen *einfach erlaubt sein, berechtigung bezeichnend*:—

mögen *auch in unterwürfiger rede, wie belieben, geruhen*:

として、Mhd. の文例

er sprach: nu muget ir mir gesagen,

wes habt ir die magt geslagen? *Erec* 76;

muget ir mich lân bevinden,

waz ist ez oder waz hât ez namen? *Erec* 7978;

(Deutsche Klassiker des Mittelalters の F. Bech の版では 7986)

が出ていた。

更に Benecke-Müller-Zarncke の Mhd. Wörterbuch の第 II 卷の 1.

(これは Zarncke 編纂の巻である) 6 頁右欄 4 行以下に次のような説明を見つけることができた。即ち見出し語 (ich) MAC の項の 4. mit einem objecte. b, mit einem infinitiv. の 1. mit persönlichem subjecte. d, ich kann, wenn ich will, es steht mir frei. の中に「疑問の形の muget ir は意味の上では我々の Optativ (Nhd. の広義のその意) ,ihr möget' 即ち ich wünsche, dass ihr に相応する」として、次のような文例が挙げられていた。

- 1) muget ir daz gefüegen *Der Nibelunge not* 848,8 in *CId.*
- 2) muget irs in ir herze schiezen, daz ir werde mir gelîche wê *Walther* 40,37
- 3) muget ir, edeliu kûnegîn, iuwer wunden teilen oder die mîne heilen *Walther* 41,1
- 4) muget ir umbe sehen *Walther* 52,19
- 5) mugt ir in durch got lân *Erec* 5474
- 6) mugt ir warten *Erec* 8007
- 7) mugt ir wunder schouwen *MS.* 2, 74.b.
- 8) sûeze Minne, maht du binden die von der ich bin gebunden, diu mîn sendez herze bant *Gottfried von Neifen*

更に言葉をつづけて「これらすべての場合に Lachmann と Haupt は疑問符をつけたが、Benecke はそれを煩わしいと云い、これらすべての表現を全く adhortativ に解している。——しかしながら、明らかに疑問形であるところの wan を伴った、全く類似の adhortativ な表現が顧慮されねばならないように思われる」といっている。wan を伴っ

た adhortativ な表現というのは、そこに挙げている Hartmann の詩 (MF 218,5) の最後の 1 行 wan mügt ir armen minnen solhe minne als ich (218,28) が示すように、warum könnt ihr nicht? という疑問文から、o möchtet ihr doch! という願望文になるのである⁽⁶⁾。

上記文例の中、1) から 6) までは大体同じ用法であるが、その中の 5) mugt ir in durch got lân に、Bech は Könntet, wolltet ihr ihn um Gottes willen nicht loslassen? という註を付けて、rhetorische Frage に訳しているが、前出の Erec 7986: mugt ir mich lân bevin-den には、普通の命令法 lât mich bevin-den に対する、より鄭重な形という註をつけている。

3) muget ir, edeliu künegîn, iuwer wunden teilen oder die mîne heilen を K. Pannier は Wollet, edle Königin, /Eure Wunden teilen/Oder meine heilen と命令法に訳し、また 4) muget ir umbe sehen を H. Böhm が Könntet ihr doch um euch blicken! と過去形の接続法を用いた願望（狭義の Optativ）に訳しているのに対して、P. Stapf は Vorerst aber schaut euch noch einmal um, P. Wapnewski は Aber seht Euch doch einmal um と何れも普通の命令法に訳している⁽⁴⁾。なお 7) は MF 175, 10 のことらしく思われるが、これは普通の疑問文と解される。

以上の諸例から mügen の直説法が願望または鄭重な命令に使われることがわかったが、しかし、これらは皆二人称（大部分は敬称に用いられた複数形で、単数形は 1 例のみ）で、これが果してそのまま他の人称にも適用されることができのかどうか、は疑問であって、それを確かめるには直接作品に当たって調べてみるよりほかなかった。

そしてその結果は Iwein, Tristan, Parzival にはそれらしい用法はほとんど見当らず, Walther では上記三例のほかに 51, 13: muget ir schouwen waz dem meien wunders ist beschert? と 58, 23: nû mugen si doch bedenken die gemeinen nôt が同じ用法と思われ, 後者ではじめて 3 人称複数形を見た。(XVII 35: mac ich dienen anderswâ は Kraus によると Walther の真作ではないとされているが, 用法としてはこれも同じであると思う)。

MF では 76, 29. 106, 1. 189, 18. は明らかに wenn の省略された副文であるが, Hartmann の詩 (MF 216, 29) の中に

mac er mich mit gemache lân (216, 33)

und île er zuo den frowen gân!

という 3 人称単数形を見つけることができた。Bech は Deutsche Klassiker des Mittelalters⁽⁶⁾ で, これを er mac mich mit gemache lân と正置にして註をつけ, 「er kann mich in Ruhe lassen. 意味の上では er lasse mich in Ruhe と同じ。mac のこの用法については Mhd. Wörterb. IIa, 6b, 5 以下を参照せよ」と記し, その例として, Erec 7986 (前出); Gregor 3550: muget ir doch mînen lîp sehen; Maurizius von Crâûn 444: swer nâch êren wil streben, er mac gemach ûf geben; Kaiserchronik 13364: dô sprach der gotis dienstman: dû maht wol urloup hân, nû var dû in gotis haz! を挙げていた。

ここまで来てようやく mûgen のこの用法に確信を得ることができたのであるが, 丁度その頃, 筆者の知人に Münster 大学の Hennig Brinkmann 教授の演習に出席している人があって, その人を通じて, 同教

授に問題の箇所を教えるを乞うたところ、次のような回答をもらうことができた。(序ながら同教授はこの頃でこそ Nhd. の文法問題も扱ってもらえるが、以前には MF の作品を成立年代順に並べた *Liebeslyrik der deutschen Frühe* (1952) を出されたこともある中世文学の専門家である)

回答の要旨を記すと

1) MF 171, 24 の *mag ichz behüeten* は *wenn* の省略された副文ではなく、一種の *Parenthese* (挿入句) と解すべきではないか。

2) この *mag* は MF 161, 40. 167, 4 のと同様 „können“, „in der Lage sein, etw. zu tun“ の意であるが、*Kontext* (文章の脈絡) 全体からみて、間接には願望をあらわしていると解してよい、というのである。

1) については筆者の考えと完全に一致しているが、2) の *Kontext* 全体からみて間接には願望をあらわすという点については、なるほど先に挙げた文例の中には *mügen* が正置されたものもあって、この場合は教授のいわれる通りであると思うが、しかし、上記文例中に多く見られた *mügen* が倒置されているものについては、いささか事情を異にするのではないかと思う。

MF 171, 24 や 161, 40 と 167, 4 のように *mag ich*, *mac si* と特に動詞が倒置されているのは、*muget ir* や *wan* を伴う願望文のように疑問形から来たのか、それともそれらが類似の用法として用いられている接続法の影響によるのではなからうか。これは Nhd. の *mögen* の場合であるが、Paul は *Deutsches Wörterbuch* で *mögen* の用法として *Gestatten* がときおり *Auffordern* に接近する、として、文例 *er mag sich in acht nehmen* を挙げ、また *mag er's glauben* のよ

うに動詞が先置されることもあるが、多分これは接続法を用いた *Aufforderungssatz* に倣ったものであろう、といっている。尤も Mhd. の場合は Behaghel によると、*Aufforderungssatz* は3人称の接続法で作られるが、現在形の接続法では動詞が正置され、過去形のそれでは倒置されるのが本来の状態であつたらしく、現在形が倒置されるのは過去形の場合の影響による、⁽⁷⁾ ということであるから、その倒置性は他に影響を与えるほど強いものであるかどうかは疑問であるが。

いま mhd. *mügen* の直説法が願望に用いられることはわかったが、nhd. *mögen* のように、*mügen* の現在形接続法が願望に用いられることはないのであろうか。Grimm は *Deutsche Grammatik* で、ahd. *magan* の現在形接続法 *megi* を Otfrid が *optativisch* に用いている、と述べた後「このような（即ち *optativisch* に用いられた現在形接続法の）mhd. *mege* または *müge* を思い出さない」⁽⁸⁾ といっているが、今度調べてみたところでは、mhd. *mügen* の現在形接続法は間接話法等には用いられているが、要求や願望に用いられている例はただの一度も見出すことができなかった。

次に同じ願望をあらわす、この mhd. *mügen* の直説法の用法と、後の nhd. *mögen* の現在形接続法の用法との間には何らかの関係がないのであろうか。これはもっとよく調べてみないと、確かなことはいえないが、これまで調べてみたところでは、mhd. *mügen* のこのような用法はどうも文法書でも取り扱われない孤立的な現象であつて、nhd. *mögen* の接続法とは直接の関係はなさそうである。

nhd. *mögen* は mhd. *müezen* 同様、その現在形接続法が主として

単なる希望を述べる場合に用いられるのに対して, mhd. *mügen* の直説法は, その用法がそれよりもっと幅広く, 一般動詞の現在形接続法のように, 命令の代用をなす直接性の強いものから単に希望を述べるに過ぎない直接性の弱いものに至るまで種々の場合に使われ, その使用範囲は nhd. *mögen* の現在形接続法のそれとは重ならないようである。例えば mhd. *mügen* の直説法は主語の人称の相違によってもその程度が異なり, 先に挙げた主語が 1 人称である MF 171. 24 の *mag ichz behüeten* は Nhd. になおせば, *möge ich es verhüten* となる, 単なる願望であり, 主語が 3 人称である MF 161. 40 の *mac si sehen an mîne stæte* と MF 167. 4 の *mac si mich doch lâzen sehen* とは命令法に近い強さをもっているといえよう。

こうしてみると, 用法の上からは nhd. *mögen* の接続法は mhd. *mügen* の直説法とよりはむしろ mhd. *müezen* の接続法と, より密接な関係がありそうに思われるのであるが, Mhd. で単なる願望をあらわす場合に用いられた *müezen* の現在形接続法が 同じ用法の Nhd. の *mögen* の現在形接続法に移ったのは, いつ頃で, どんな経過をたどったのであろうか。

この問題については, 筆者のみるところでは, I. Dal, *Kurze deutsche Syntax* の, 主文に於ける voluntativer Konjunktiv Präs. について述べている節 (§ 104) で, 1 人称について「単独時称の接続法の代りに話法の助動詞による書き換えが行われているのが早くから見られる。そしてこの書き換えは一般動詞の接続法がもはや用いられなくなつてから, 独占的になる。助動詞としては本来 ahd. *muozi*, mhd. *müeze* が用いられ (mhd. の文例 *mit sælden müeze ich hiute ûf stên*

〔Walther〕), Luther でもまだ用いられている(文例 so müsse ich säen, und ein anderer esse es, und mein Geschlecht müsse ausgewurzelt werden)。müssen が Verpflichtetsein の意味をとってから, mögen がそれに代って助動詞として用いられるようになった(文例 möge ich ihn nie wiedersehen)』3人称について「ここでも極く早い時代から, 話法の助動詞による書き換え(最初は müssen, 後にはそれに代る mögen による)が現われる: ahd. の文例 fon got er muazi habên munt (Otfrid); nhd. の文例 so müsse die ganze Stadt von meiner Zagheit sagen (Gryphius); mögen sie gegen uns hetzen.⁽⁹⁾」と書かれているのが, 比較的明確な回答と思われた。

こうして調べて行くうちに, いろいろと疑問が続出したのであるが, これらの諸問題について, もっと詳細なことをご存じの方があったら, 教えていただければ幸いである。

註

- (1) Des Minnesangs Frühling は Lachmann と Haupt によって出版され, Fr. Vogt による改訂後, Kraus が更に改訂したのであるが, 本稿はこの Kraus の改訂版によった。なお Walther も Lachmann 出版, Kraus 改訂の Die Gedichte Walthers von der Vogelweide によった。
- (2) Kraus は Reinmar の真作と見られるもの30篇余りを成立年代順に並べて, ひとつの Zyklus を構成したが, このことについては「独逸文学研究」報告第4号及び第5号に掲載の拙稿「ミネ歌人ラインマル」を参照されたい。
- (3) この詩(MF 198, 28)を, Kraus は多くの学者の説に反して偽作としたが, Fr. Maurer は最近の著書 Die „Pseudoreimare“ (S. 84-6)で, それが不当であることを論じている。
- (4) Hans Böhm: Die Gedichte Walthers von der Vogelweide.

中高ドイツ語の動詞 *mügen* の一用法について

Urtext mit Prosaübersetzung. 1944.

Paul Stapf: Walther von der Vogelweide. Sprüche. Lieder. Der Leich. Urtext · Prosaübersetzung. 1955.

Peter Wapnewski: Walther von der Vogelweide. Gedichte.

Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. 1962.

以上三書の現代ドイツ語訳を比較してみるのには興味深い。Stapf は大体 Böhm によっているようであるが、Walther 52, 19: *muget ir umbe sehen* の訳に見られるように Wapnewski が Stapf によったと思われる箇所がときおりある。例えば、この1行の入っている詩節は「いとしき君よ、私を憂いから解き放ち、この季節（五月）を私にとって好ましいものにして下さい。でないと、私は快活さをひとに借りなければなりません」といって、その後

daz ir sælic sit !

muget ir umbe sehen ?

と続くのであるが、その *daz ir sælic sit* を Böhm は Segen über euch ! と普通の意味に訳しているのに、Stapf は Dann aber : Lebet wohl ! Wapnewski は Dann : Gehabt Euch wohl ! と訳している。これは確かに新訳であって、これだと, *frouwe* (=Herrin) に向って「そのときは、さようなら」と云って別れを告げることになるのであるが、しかし、別れのときにこのような表現が使われるかどうか。ここも、Mhd. Wör-terb. の *sælec* 1. b. lobend, wünschend, bittend und beschwörend. のところに挙げてある Walther 14, 34 の *frowe, daz ir sælic sit ! lânt mit hulden mich den gruoze verschulden* と同じく「あなたが祝福されますように、幸福でありますように」というのは「後生だから」という意味であると思うのだが、どうであろう。

- (5) この *wan* については Lachmann が „Anmerkungen zu den Nibelungen und zur Klage“ の S. 64—5 で多くの文例をあげ、1頁余にわたって詳細に説明している。かいつまんでいうと、*wan* の文のあとに命令文が続くことが多いということ、*wan* は *wande ne* (=warum nicht) やその省略形 *wanne* の中に含まれている否定詞 *ne* が消えたのだと思うということ、前に挙げた Nib. 848, 8 や Walther 51, 13. 52, 19 の *muget ir ?* という成句も *wan muget ir?* の *wan* が脱落したのであるというこ

と、この疑問並びに願望をあらわす *wan* を、*wanne* (=wann) や *wan* (=nur) に帰する試みは断念すること等である。因みに *wanne* (=wann) もその省略形が *wan* になるのであるが、前出の *Hartmann* の詩の1行 (MF 218, 28) を *Wehrli* が *wann mögt ihr Armen solche Liebe lieben wie ich ?* と訳しているのは明らかに誤りであると思う。*Wehrli* の訳にはこの種の誤りがときどきある。

- (6) *Deutsche Klassiker des Mittelalters*. Band V. *Hartmann von Aue* 2. S. 13.
- (7) *O. Behaghel: Deutsche Syntax*. IV. S. 40-1.
- (8) *J. Grimm: Deutsche Grammatik*, IV. S. 86.
- (9) *I. Dal: Kurze deutsche Syntax*, S. 138-40.